



TITLE:

王子セミナー「非線型非平衡統計力学」の印象

AUTHOR(S):

富田, 博之

CITATION:

富田, 博之. 王子セミナー「非線型非平衡統計力学」の印象. 物性研究
1978, 30(5): 241-242

ISSUE DATE:

1978-08-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/89565>

RIGHT:

王子セミナー「非線型非平衡統計力学」の印象

京大教養 富田博之

私にとっては正式の参加者としての国際会議は初めてであり、開催日が迫るにつれ何となく気が重く憂うつであった。しかし5日間も同じ屋根の下で生活しつつ行われる研究集会というのは国内でもめったに経験しないものであるから貴重な経験であり、参加者のあれやこれや様々なキャラクターが思い出され、終ってみると何か寂しささえ感じる。

日頃から論文を通じて想像していた人物と御本人の印象が全然異なる例が何人かあった。若手の間で共通してそういう印象を受けた代表例は、Lebowitz 先生である。オクターブの高い独得の発音であらゆる問題に口をはさみ、テレ隠しに両手で顔をおおったり、退屈してくるとキョロキョロとまわりをみわたして、側に座っている人からタバコをまきあげる。三千院の観世音像の前で正座しろと言ったら 'I'm sorry.' と努力を試みたのも先生だけであった。

若手の間で人気の高かったのは Van Kampen 先生である。ゴマ塩頭を刈りあげて、背中の少し曲りかけた独得の風貌から、誰言うともなく「村長さん」というアダ名がつけられてしまった。十年前の国際会議の時、琵琶湖に飛び込んだことで有名だ、と言うと「わしは世界中どこでも泳ぐ。去年はハイファで泳いだ。おまえ等そんなに不思議か？」夜のロビーでクイズを出されて困りはて「物理より難しいだろう」と冷やかされると 'Ah,, but, physics is well-defined!' と降参。もっとも先生、やられっぱなしではなく、風呂から上ってきて「身体を洗わずに浴槽にとび込んだ若い衆がおる。おまえとおまえだ」と「九州方式」を暴露して逆襲もした。

また実直そのものの Ruelle 先生に「あなたは4次元空間を imagine できるのですか」と尋ねて「いや、3次元へのポアンカレマップでしかわかりません」とまじめに答えさせたりもしたが、冷かしてばかりいたわけではない。受入れ側としての十分なもてなしもしたつもりである。Langer 先生にセミナー後の奈良旅行をせがまれて奈良ホテルの予約をとったのはいいが、先生心配なのか毎日のように質問をし、挙句のはてS氏が近鉄の時刻表をコピーし、まずタクシーに乗ったらこの紙切れをわたし、京都駅のこの

富田博之

切符売場でこれをわたせと、小冊子を作成、翌日になって Martin 先生が同じものを御所望、交通公社顔まけのサービスもした次第である。

セミナーは7月10日から14日まで5日間にわたり京都市左京区一乗寺「関西セミナーハウス」で行われ、国外からは20名の参加が得られた。最後になって参加できなかったソ連を除けば、この分野での代表的なスクールをほぼ網羅していたと思う。Prigogine スクールによって 'dissipative structure' という概念が提案され、Haken 氏により 'Synergetics' という言葉が持ち込まれ、対照的に日本では「非線型非平衡統計力学」と何とも味も素っ気もない名前がつけられたこのバクとした分野に力が注がれ始めてからすでに7~8年になるだろうか、初期の頃の渾沌とした状況からみれば、問題自体がずい分洗練されてきて、いくつかの突出部分が現われてきたと思う。その代表例が今回もかなりの部分を占めた、'bifurcation hierarchy' であり、皮肉なことに 'chaos の発生' である。

参加者の数から言っても国内と国外の仕事を比較するのは無意味かもしれないが、あえて比較するならば、全体としては国内の仕事の方が、着実に攻め込み詰めていっているような印象が強かったと思う。例えば Prigogine スクールや、米国の化学系グループでは、基盤として熱力学の強みを持ちながらも、かえってそれにこだわりすぎて形式的アナロジーを玩んでいるくらいがないでもない。この意味では国外からの参加者の講演で印象に残ったのが、Ahlers 氏や Swinny 氏等の実験グループの意気の高さと、これは個人的興味かもしれないが、Langer 氏の 'dendritic crystal growth' という、やっかいな問題に対する挑戦、ぐらいであったというのも偶然ではないかもしれない。

この時期に小規模ながらも日本でこのような集会がもたれたことはまさに機を得たもので、Proceedings は画期的なものとして残るのではなかろうか。欲を言えば、国外から我々の世代がこれからつきあっていかなければならない層の参加が少なかったことが残念であるが、少なくとも国内ではこのテーマでの基研研究会に顔を出してきた人のほぼ全員に何らかの形で参加の途が開かれていたことは、この集会の意義を一層深めたと思う。

最後に今回のセミナーの計画・実行に御甚力いただいた森肇先生と、事務局の方々に、若手を代表して心から感謝の意を表したい。

(7 月 20 日)